

小説めいたものを拵えてひっそり世に公開したこともありました。一ヵ月後にその場を訪れてみますと、全く読まれた形跡がありませんでした。わたくしはそれを自分で読み返してみましたが、それは本当に読むに堪えない代物でした。わたくしは慌ててそれを削除しました。誰にも読まれていなくて本当によかったと思いました。

馬さんがあのとき図らずもわたくしに与えてくれた暗示のようなものが再び頭をもたげたのは、わたくしの精神が退屈に埋もれて死に至ろうとする手前のことでした。その暗示のようなものとは即ち、日本語を学ぶ中国人を、読者に想定した小説を書く、ということでした。そのような需要に応えようとした小説は、わたくしの知る限り存在しません。そのような小説が書かれることが、この世に必要とされていたのです。暗示はわたくしの中で明示されました。ここにわたくしは、需要と供給が一致することを見出したのであります。わたくしの消えかかっていた精神は、再び人並みの活気を取り戻しました。自分でも不思議なぐらい力が湧いてきたのです。この時わたくしは勝手ながら、その需要に応えるという淡い使命感のようなものを抱いてしまったのです。

「吾輩ハ猫デアル」という小説は、どなたもご存知かと思えます。あのとき馬さんによってこっぴどく批評された人によって書かれた、初めての小説です。わたくしはこの作品を愛読しておりましたので、軽率にもそれをもじって、「吾輩ハ猫ニナル」という題名にさせていただきました。題名はこ

の交差点にある店で一人醬油らーめんをすすりながら、店の窓から見える夜空を眺めていたときでした。そこには、霧でうす汚れた、美しい三日月が浮かんでいたのです。

わたくしは土産のお礼だと云って、今度は自分から藤本を食事に誘いました。わたくしは人を誘うようなことを滅多にしない人間でしたから、電話先の彼の声は少し動揺していましたが、その意外性を喜んでくれたようでした。わたくしはさりげなく、彼が再び前回の旅行の話を話題にしたがるよう仕向けました。それから、彼の学校の様子や中高生の間で流行っていることなども、難なく聞き出しました。わたくしは、人の話を引き出すことにかけては人より長けていると自負しておりましたから、それは容易いことでありました。彼は旅行先で自分の携帯で撮った写真を、わたくしに見せてくれました。わたくしは写真の中にいる一人の青年を指さし、これがあの青年じゃないのかと云うと、彼は狐キツネにつままれたような顔をしました。

わたくしがいつになく興味津々に話を聞いていたものから、彼は、何だったら今からいっしょに学校へ行ってみないか、と持ちかけてきました。彼はどちらにせよ、帰りに忘れ物を取りに寄るつもりだったようです。学校は店から歩いて行ける距離にあるというので、わたくしはその提案に快く同意しました。

学校は本当に歩いてすぐの所にありました。水色が基調の、整然とした教室でした。机は大きな円卓が真ん中に一つ

うしてすぐに決まったのですが、内容のほうは一向に空っぽのままでした。会社の業務日報の書き方であれば心得ておりましたが、小説の書き方となるとそう簡単にはいかないのです。

わたくしは近くの公園へ出かけて、猫をよく観察しました。さて、どうやって猫になったものでしょう。猫はいつも何を考えているのでしょうか。そもそも猫になる、というのは、一体どういうことなのでしょう。草むらに足を踏み入れて、小声で「にゃー」と云ってみました。人気がない所で四つん這いになってみました。それでも、わたくしには何の発想も浮かんできませんでした。

そんなある日、わたくしの上海での唯一の日本人の知人である、藤本という男から電話があって、飲みに行こうと誘われました。彼はわたくしに、日本の土産を持ってきてくれました。七福神の顔を模した人形焼でした。彼は上海のとある学校で中高生に日本語を教えているのですが、一週間ほど前に中国人の生徒を連れて日本へ旅行に行ってきたのです。彼はその旅行中の学生たちの反応を、わたくしに面白おかしく語って聞かせました。わたくしはその日も小説と猫のことで頭がいっぱいだったのですから、実のところ何を聞いても上の空でした。

ところが、その中で彼が話した一人の青年の話だけは、妙に耳に残っていました。ひょっとすると、これは小説になるかもしれない……。そう思ったのは、深夜に天山路と馬当路

あるだけでした。富士山や新幹線や舞妓さんや鯉のぼりの写真が壁に貼られてありました。教室の隅っこには笹が立て掛けてありました。学生達に日本語で願い事を書かせ、そこに吊るしてあったのです。多くは日本語の上達や家族の健康を願うものでしたが、中高生にありがちな素直でないものも一定数ありました。わたくしはその中に、妙な短冊を一枚見つけました。そこには、俳句のようなものが書かれてありました。藤本に確認するまでもなく、それはやはり、わたくしの気にしていた例の青年の手によるものでした。その言葉の意味は、判然としません。ただ、わたくしはその句をどこかで知っているようでした。

それから数日を経て、どういうわけか解りませんが、この「吾輩ハ猫ニナル」という作品の物語が、それこそ猫が乗り移ったかのように動き出したのであります。あの写真の青年の目が、あの短冊に書かれた一篇の短い詩が、そうさせたのかもしれない。わたくしはまだ、この作品を読んだ感想を馬さんの口から聞いていません。

一

ラーメンがまだ来ない。一起にたのんだ鍋貼ゴシヤクはとうに「お熱いうち」の期間を通りすぎ、三分の二は嘴くちばしに入れてしまったのだが、一向に主角キョウシャクがやってくる動静どうじやうはない。仕方なく次なる鍋貼ゴシヤクを筷はしでやんわりと夾みあげ、黒醋くろすずに軽く浸したあと、ま